

明治・大正期における女性の読書と読書活動の実態

中澤 佑奈

明治・大正期において女性による読書は男性の読書と比べると、非生産的であると捉えられていた。また、家事と夫への補佐が本分であり、良妻賢母が目指されていた当時の女性にとって、読書をしないことが世間的に良い女性であるとされてきた。しかし、このような女性による読書に対する否定的風潮の中、図書館や学校などで女性を対象にした資料提供サービスが行われてきた。本研究では、明治・大正期における女性の読書と女性を対象にした読書活動について調査を行った。

本研究では、明治・大正期の日本における女性の読書状況や女性を対象にした読書活動に関して、その実態を明らかにすることを目的とした。研究対象は、明治・大正期における女性による読書と読書活動である。実態を明らかにするために図書館や学校、各種団体を分析対象とした。図書館は、公共図書館、学校図書館、私立図書館を含むものとし、読書活動は個人による読書や図書館、青年団、婦人会などで開催されている読書週間や読書会などの読書活動普及のための活動を対象とする。研究方法は、文献調査を用いた。

調査の結果から、明治初期では女性の読書が推奨されていなかったが、次第に生活に実用的な読書が求められるようになり、大正期になると女性の読書に対する考えが社会的に変化したことが明らかになった。読まれていたジャンルも小説など娯楽的なジャンルから参考書や専門書など専門的なジャンルへと変化した。社会的階級によって読書に違いがあることが判明し、女学生は小説や婦人雑誌、専門書などを読み、職業婦人は硬い内容の書籍、一般・婦人雑誌、仕事に必要な書籍、女工は労働者向けの雑誌や新聞、家庭の主婦は婦人雑誌、内容が簡単な書籍と家庭に実用的な書籍を読んでいた。また、学校によって読書指導の有無があったことが明らかになった。

図書館や学校におけるサービスと読書活動について、婦人閲覧室の設置と拡張、夜間開館の実施、資料の提供、巡回文庫、無料配本、講演会、図書目録の配布、古本の売買が行われてきたことが明らかになった。しかし、夜間開館の利用は男性にのみ認められ、女性が利用することはできなかった時期があることが判明した。

青年団や婦人会等では、婦人図書閲覧所または図書館の設置と読書会の開催が実施されていたことが明らかになった。設置理由と開催理由は、女性専用の図書館がないため、女性の教育に貢献するため、教養の貧困層の青年子女を非行に走らせないため、女子教育における知識の補完のためとさまざまであった。

本研究を通して、女性による読書は社会的・個人的に変化していることが解明された。今後、地方新聞や各図書館の周年史などを調査することにより、地方の図書館の読書活動や利用者の状況、読書活動を実施していた他団体について明らかにすることができる。

(指導教員 吉田 右子)